琉球大学学術リポジトリ

2次元格子形フィルタの一設計法とスペクトル解析への応用

メタデータ	言語:	
	出版者: 琉球大学工学部	
	公開日: 2008-03-31	
	キーワード (Ja):	
	キーワード (En): Digital filter, Two-Dimensional lattice	
filter, Spectral analysis		
	作成者: 山下, 勝己, 仲地, 孝之, 宮城, 隼夫, Yamashita,	
	Katsumi, Nakachi, Takayuki, Miyagi, Hayao	
	メールアドレス:	
	所属:	
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5475	

2次元格子形フィルタの一設計法と

スペクトル解析への応用

山下勝己*仲地孝之** 宮城隼夫*

A Design Method of a Two-Dimensional Lattice Filter and Its Application to Spectral Analysis

Katsumi YAMASHITA Takayuki NAKACHI Hayao MIYAGI

Summary

The theory of lattice parameter modeling for one-dimensional signals has been well developed in recent years. However, until now, few works have been done concerning the theory of lattice parameter modeling for two-dimensional fields. In this paper, a new design method of two-dimensional lattice filter is presented using quarter-plane forward and backward prediction error fields. Furthermore, the use of the proposed filter to spectral analysis is described.

Key words: Digital filter, Two-Dimensional lattice filter, Spectral analysis

1. まえがき

ディジタル信号処理に関する種々の成果および実用 的ディジタル信号処理プロセッサ装置の登場により, 近年,ディジタル信号処理技術はあらゆる分野におけ る必要不可欠な基礎技術になりつつある.また、2次 元ディジタル信号処理は、リモートセンシング画像処 理,医用画像処理、パターン認識などの発達に伴い, 特に重要な課題となりつつある.

1次元信号を対象としたフィルタ設計に対して、ト ランスパーサル形および格子形構造を有する種々のフ ィルタが構築されているが、格子形構造を有するフィ ルタは、低係数感度特性、高速演算性および次数可変 などのさまざまな優れた特質を有することから、同フ ィルタは多大なる注目を受けている。それ故、2次元 信号を対象とした2次元フィルタの設計においても、 格子形構造を有する2次元格子形フィルタの設計が種 々提案されている、T.L. Marzetta は⁽¹⁾、1次元格 子形フィルタの設計が正規方程式の逐次解法であるレ ビンソン・ダービン算法の構造化に基づくことから, 同逐次解法を2次元に拡張した2次元格子形フィルタ を設計している.しかし,同アルゴリズムは,因果性 をもたない変数の次数を無限にする際には安定性が保 証されるものの,因果性のない方向への次数を有限化 する場合には,この有限化により安定性が必ずしも補 償されず,また,推定精度にも問題を生じることが,

S. Ranganath らにより指摘されている⁽²⁾.

一方, S. R. Parker らは⁽³⁾, 1次元格子形フィル タの構造に着目することにより, その構造の2次元へ の拡張形として, 一つの前向き予測誤差と三つの後向 き予測誤差をもち, 1ステージ当り3種類の反射係数 をもつ2次元格子形フィルタを提案している. 更に, 渡辺らは⁽⁴⁾, Parker の格子形フィルタでは, その係 数制約から十分近似し得ない特性が存在することを指 摘し, Parker らの考え方を基盤とした1ステージ当 り6種類の反射係数をもつ, 改良した2次元格子形フ

受理:1992年11月9日

^{*}工学部電子· I 的 # Dept. of Electronics and Information Engineering, Fac. of Eng.

^{**}大学院工学研究科電気·情報工学専攻 Graduate Student, Electrical and Information Engnieering.

ィルタを構築している。しかしながら、同アルゴリズ ムには2次元定常確率場において必ずしも成立しない 条件が存在する.

本論文では、前者のレビンソン・ダービン算法を2 次元に拡張し、2次元格子形フィルタを構築するもの ではあるが、本手法は予測誤差として一つの前向き予 測誤差と三つの後向き予測誤差を用いて逐次式を構築 することから、有限次数のマスクに対しても安定性が 保証された逐次解法となる. なお、本手法の有効性の 検証については、渡辺らにより提案されたモデルを対 象に2次元格子形フィルタを構築し、Parker らおよ び渡辺らの2次元格子形フィルタにより得られる前向 き予測誤差フィルタの伝達関数との比較により行う.

また、2次元 AR 格子形フィルタを用いた応用的 研究としてパワースペクトル推定がある。一般に、2 次元信号のスペクトル解析に関する研究は、1次元系 列と同様フーリエ変換による方法、最大エントロピー 法(MEM)、最ゆう推定法(MLM)、AR モデルに よる方法など分類できるが、ここでは渡辺らが提案し たARモデル推定法⁽⁴⁾を用いたスペクトル推定を用い て2次元信号のスペクトル解析を行う。

2. 反射係数の決定

2 次元格子形フィルタの次数を N 次と仮定し,格 子点 (n,m) における前向き子測誤差 f_N(n,m) およ び格子点 (n-N,m), (n-N,m-N), (n,m-N) に おける後向き子測誤差 r¹_N(n,m), r²_N(n,m), r³_N(n, m) をそれぞれ次式のように定義する.

$$f_{N}(n,m) = \sum_{i=0}^{N} \mathbf{a}_{N}(i) \mathbf{y}(i)$$
(1a)

$$\mathbf{r}^{\mathbf{l}}_{\mathbf{N}}(\mathbf{n},\mathbf{m}) = \sum_{i=0}^{N} \mathbf{b}_{\mathbf{N}}(i) \mathbf{y}(i)$$
(1b)

$$r^{2}_{\mathbf{N}}(\mathbf{n},\mathbf{m}) = \sum_{i=0}^{N} \mathbf{c}_{\mathbf{N}}(i) \mathbf{y}(i)$$
 (1c)

$$r_{N}^{3}(n,m) = \sum_{i=0}^{N} d_{N}(i) y(i)$$
 (1d)

但し,

$$\mathbf{a}_{N}(i) = [\mathbf{a}_{N}(i, 0), \cdots, \mathbf{a}_{N}(i, N)]$$
 (1e)

$$\mathbf{b}_{N}(i) = [\mathbf{b}_{N}(N-i,0), \cdots, \mathbf{b}_{N}(N-i,N)]$$
(1f)

$$\mathbf{c}_{\mathbf{N}}(\mathbf{i}) = [\mathbf{c}_{\mathbf{N}}(\mathbf{N}-\mathbf{i},\mathbf{N}),\cdots,\mathbf{c}_{\mathbf{N}}(\mathbf{N}-\mathbf{i},\mathbf{0})]$$
(1g)

$$\mathbf{d}_{N}(i) = [\mathbf{d}_{N}(i, N), \cdots, \mathbf{d}_{N}(i, 0)]$$
(1h)

$$\mathbf{y}^{\mathrm{T}}(\mathbf{i}) = [\mathbf{y}(\mathbf{n} - \mathbf{i}, \mathbf{m}), \cdots \mathbf{y}(\mathbf{n} - \mathbf{i}, \mathbf{m} - \mathbf{N})]$$
(1)

なお、上記の $\mathbf{a}_{N}(i)$, $\mathbf{b}_{N}(i)$, $\mathbf{c}_{N}(i)$, $\mathbf{d}_{N}(i)$, および y(i) はそれぞれ (N+1) 次元からなるベクトルを表 わし、また、 $\mathbf{a}_{N}(0,0)$, $\mathbf{b}_{N}(0,0)$, $\mathbf{c}_{N}(0,0)$ および \mathbf{d}_{N} (0,0) は1を表わす、更に、添え字 T は転置記号を 表わす。

また,各予測誤差の2乗平均を次式のように定義する.

$$J_{N}^{o} = E[\{f_{N}(n,m)\}^{2}]$$
(2a)

$$J_{N}^{i} = E[\{r_{N}^{i}(n,m)\}^{2}]$$
(2b)

$$(i=1, 2, 3)$$

但し、記号 E は期待値を意味する演算子である. このとき、上式に式(1)を代入し、各係数で偏微分し零 と置くことにより得られる関係式および式(2)の最小値 に関する関係式は、次式のような行列形式で記述する ことができる.



但し,

$$\Delta^{0}{}_{N} = [\hat{J}^{0}{}_{N}, 0, \cdots, 0], \Delta^{1}{}_{N} = [\hat{J}^{1}{}_{N}, 0, \cdots, 0]$$
(3b)
$$\Delta^{2}{}_{N} = [0, \cdots, 0, \hat{J}^{2}{}_{N}], \Delta^{3}{}_{N} = [0, \cdots, 0, \hat{J}^{3}{}_{N}]$$
(3c)

なお、 Δ^i_N は式(2)の最小値 \hat{J}^i_N を要素とする (N+1) 次元のベクトルを表わし、また、 R_N は次式で示すよ うな $(N+1)^2 \times (N+1)^2$ のブロックテブリッツ行列を 表わす.

$$\mathbf{R}_{N} = \begin{bmatrix} \mathbf{R}_{0} & \mathbf{R}_{1} & \cdots & \mathbf{R}_{N} \\ \mathbf{R}_{-1} & \mathbf{R}_{0} & \cdots & \mathbf{R}_{1-N} \\ \vdots & \vdots & \cdots & \vdots \\ \mathbf{R}_{-N} & \mathbf{R}_{N-1} \cdots & \mathbf{R}_{0} \end{bmatrix}$$
(4a)

但し,

)

$$\mathbf{R}_{i} = \begin{bmatrix} \mathbf{R}(\mathbf{i}, 0) & \mathbf{R}(\mathbf{i}, 1) & \cdots \mathbf{R}(\mathbf{i}, \mathbf{N}) \\ \mathbf{R}(\mathbf{i}, -1) & \mathbf{R}(\mathbf{i}, 0) & \cdots \mathbf{R}(\mathbf{i}, \mathbf{N} - 1) \\ \vdots & \vdots & \cdots \vdots \\ \mathbf{R}(\mathbf{i}, -\mathbf{N}) & \mathbf{R}(\mathbf{i}, 1 - \mathbf{N}) \cdots \mathbf{R}(\mathbf{i}, 0) \end{bmatrix}$$
(4b)

なお, **R**_i の要素である **R**(**i**, **j**) は次式で定義される 自己相関関数を表わす.

$$\mathbf{R}(\mathbf{i},\mathbf{j}) = \mathbf{E}[\mathbf{y}(\mathbf{n},\mathbf{m})\mathbf{y}(\mathbf{n}-\mathbf{i},\mathbf{m}-\mathbf{j})]$$
⁽⁵⁾

次に, レビンソン・ダービン算法に基づいて次数に 関する再帰式を構成する.まず,N 次に関する式(3 a)の関係式に基づいて(N+1)次の関係式を次式の ように定義する.

$$\begin{bmatrix} \mathbf{a}_{N+1}(0) & \mathbf{a}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{a}_{N+1}(N) & \mathbf{a}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{b}_{N+1}(0) & \mathbf{b}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{b}_{N+1}(N) & \mathbf{b}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{c}_{N+1}(0) & \mathbf{c}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{c}_{N+1}(N) & \mathbf{c}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{d}_{N+1}(0) & \mathbf{d}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{d}_{N+1}(N) & \mathbf{d}_{N+1}(N+1) \end{bmatrix} \mathbf{R}_{N+1}$$

$$= \begin{bmatrix} \Delta^{0}_{N+1} & \mathbf{0} & \cdots & \mathbf{0} & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & \mathbf{0} & \cdots & \mathbf{0} & \Delta^{1}_{N+1} \\ \mathbf{0} & \mathbf{0} & \cdots & \mathbf{0} & \Delta^{1}_{N+1} \\ \mathbf{0}^{3}_{N+1} & \mathbf{0} & \cdots & \mathbf{0} & \mathbf{0} \end{bmatrix}$$
(6)

次に、式(3a)のN次に関する係数を用いて
 (N+1)次の関係式を定義し、定義した関係式に
 (N+2)²×(N+2)²のブロックテプリッツ行列R_{N+1}
 を右乗することにより、次式の関係式を構成する。

$$= \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{N}(0), 0 & \mathbf{a}_{N}(1), 0 & \cdots & \mathbf{a}_{N}(N), 0 & \mathbf{0} \\ \mathbf{0} & \mathbf{b}_{N}(0), 0 & \cdots & \mathbf{b}_{N}(N-1), 0 & \mathbf{b}_{N}(N), 0 \\ \mathbf{0} & 0, \mathbf{c}_{N}(0) & \cdots & 0, \mathbf{c}_{N}(N-1) & 0, \mathbf{c}_{N}(N) \\ \mathbf{0}, \mathbf{d}_{N}(0) & 0, \mathbf{d}_{N}(1) & \cdots & 0, \mathbf{d}_{N}(N) & \mathbf{0} \end{bmatrix} \mathbf{R}_{N+1}$$

$$= \begin{bmatrix} \mathbf{\hat{J}}^{0}_{N}, 0 \cdots 0, \Delta^{a}_{0, N+1} & 0 & 0 \cdots 0, \Delta^{a}_{1, N+1} \cdots \\ \Delta^{b}_{0, 0}, \cdots & \Delta^{b}_{0, N+1} & 0 & 0 \cdots 0, \Delta^{b}_{1, N+1} \cdots \\ \Delta^{c}_{0, 0}, 0 \cdots & \Delta^{c}_{0, N+1} & \Delta^{c}_{1, 0}, 0 \cdots 0, 0 & \cdots \\ \Delta_{0}^{d}, 0, 0 \cdots 0, \mathbf{\hat{J}}^{3}_{N} & \Delta^{d}_{1, 0}, 0 \cdots 0, 0 & \cdots \end{bmatrix}$$

$$\begin{array}{c} 0 \quad , 0 \cdots 0, \Delta^{a}_{N, N+1} \Delta^{a}_{N+1, 0}, \cdots , \Delta^{a}_{N+1, N+1} \\ 0 \quad , 0 \cdots 0, \Delta^{b}_{N, N+1} \quad \hat{J}^{1}_{N} \quad , 0 \cdots 0, \Delta^{b}_{N+1, N+1} \\ \Delta^{c}_{N, 0}, 0 \cdots 0, \quad 0 \quad \Delta^{c}_{N+1, 0}, 0 \cdots 0, \quad \hat{J}^{2}_{N} \\ \Delta^{d}_{N, 0}, 0 \cdots 0, \quad 0 \quad \Delta^{d}_{N+1, 0}, \cdots , \Delta^{d}_{N+1, N+1} \end{array}$$
(7a)

但し,

$$\Delta^{a}_{s,t} = \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} a_{N}(i,j) R(s-i,t-j)$$
(7b)

$$\Delta^{b}_{s}, t = \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} b_{N}(N-ij)R(s-i-1,t-j)$$
(7c)

$$\Delta^{c}_{s,i} = \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} c_{N} (N-i, N-j) R(s-i-1, t-j-1) (7d)$$

$$\Delta^{d}_{s,t} = \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} d_{N}(i, N-j) R(s-i, t-j-1)$$
(7e)

$$(0 \leq s, t \leq N+1)$$

一方, 4X4次の反射係数行列 k_{N+1}を次式のよう に定義する.

$$\mathbf{k}_{N+1} = \begin{bmatrix} \mathbf{k}_{1,1} & \mathbf{k}_{1,2} & \mathbf{k}_{1,3} & \mathbf{k}_{1,4} \\ \mathbf{k}_{2,1} & \mathbf{k}_{2,2} & \mathbf{k}_{2,3} & \mathbf{k}_{2,4} \\ \mathbf{k}_{3,1} & \mathbf{k}_{3,2} & \mathbf{k}_{3,3} & \mathbf{k}_{3,4} \\ \mathbf{k}_{4,1} & \mathbf{k}_{4,2} & \mathbf{k}_{4,3} & \mathbf{k}_{4,4} \end{bmatrix}$$
(8)

上式では表現の煩雑さを避けるため、行列の要素に付加すべき添え字 N+1の記述を省略している.

このとき,式(7a)の両辺に上記の反射係数行列を左 乗し得られた関係式と式(6)の関係式とが一致するよう に **k**_{N+1}を求めると,**k**_{N+1}の要素に関して以下のよう な関係式が得られる.

$$k_{i, 1} \hat{J}^{o}{}_{N} + k_{i, 2} \Delta^{b}{}_{o, o} + k_{i, 3} \Delta^{c}{}_{o, o} + k_{i, 4} \Delta^{d}{}_{o, o} = 0$$

$$(i = 2, 3, 4) \quad (9a)$$

 $\begin{aligned} k_{i,1} \Delta^{a}{}_{N+1, o} + k_{i,2} \hat{J}^{I}{}_{N} + k_{i,3} \Delta^{c}{}_{N+1, o} + k_{i,4} \Delta^{d}{}_{N+1, o} = 0 \\ (i = 1, 3, 4) \quad (9b) \end{aligned}$

$$\begin{aligned} \mathbf{k}_{i, 1} \Delta^{a}_{N+1, N+1} + \mathbf{k}_{i, 2} \Delta^{b}_{N+1, N+1} + \mathbf{k}_{i, 3} \tilde{J}^{2}_{N} \\ &+ \mathbf{k}_{i, 4} \Delta^{d}_{N+1, N+1} = 0 \qquad (i = 1, 2, 4) \quad (9c) \end{aligned}$$

 $\begin{array}{l} k_{i}, {}_{1}\Delta^{a}{}_{o}, {}_{N+1} + k {}_{i}, {}_{2}\Delta^{b}{}_{o}, {}_{N+1} + k_{i}, {}_{3}\Delta^{c}{}_{o}, {}_{N+1} + k_{i}, {}_{4}\hat{J}^{3}{}_{N} = 0 \\ (i = 1, 2, 3) \quad (9d) \end{array}$

$$k_{i}, {}_{1}\Delta^{a}_{j}, {}_{N+1} + k_{i}, {}_{2}\Delta^{b}_{j}, {}_{N+1} = 0$$
(9e)

$$\mathbf{k}_{i, 2} \Delta^{\mathbf{b}}_{\mathbf{o}, j} + \mathbf{k}_{i, 3} \Delta^{\mathbf{c}}_{\mathbf{o}, j} = 0$$
(9f)

 $\mathbf{k}_{i}, \, _{3}\Delta^{c}_{j}, \, _{o} + \mathbf{k}_{i}, \, _{4}\Delta^{d}_{j}, \, _{o} = 0 \tag{9g}$

$$\begin{aligned} k_{i}, {}_{4}\!\Delta^{d}_{N+1}, {}_{j}\!+\!k_{i}, {}_{1}\!\Delta^{a}_{N+1}, {}_{j}\!=\!0 \end{aligned} (9h) \\ (i\!=\!1,\cdots\!,4, j\!=\!1,\cdots\!,N) \end{aligned}$$

但し,

 $\mathbf{k}_{1,1} = \mathbf{k}_{2,2} = \mathbf{k}_{3,3} = \mathbf{k}_{4,4} = 1$ (9i)

なお、上記の関係は以下の操作により、前向きおよび 後向き予測誤差で表わした関係に書き直すことができ る. まず, 式 (9f) の j 番目の関係に a_N(0,j) を乗 じ、すなわち、1番目には a_N(0,1) を、2番目には a_N(0,2) を順次乗じ、また、式(9g)の j 番目の関 係には a_N(j,0)を乗じ、この2N 個の関係式を式 (9a) に加えれば前向きおよび後向き予測誤差で表わした式 (10a)の関係が得られる.なお、導出に際しては付 録1の式 (A•4), (A•12), (A•13), (A•14) および (A・15)の関係式を利用する.同様に,式(9g)に b_N(N+1-j, 0) を式 (9h) に b_N(0,j) を乗じ式 (9 b) に加えれば、また、式 (9e) に c_N(N+1-j,0) を式 (9h) に c_N(0, N+1-j) を乗じ式 (9c) に加え れば, 更に, 式 (9e) に d_N(j,0) を式 (9f) に d_N(0, N+1-j) を乗じ式 (9d) に加えれば式 (10b), (10c) および(10d)が得られる.なお,式(10b)の導出 には式 (A•8), (A•11), (A•13), (A•16) および (A·17) を, 式 (10C) の導出には式 (A·9), (A·14), (A•16) および (A•18) を,式 (10d) の導出には 式 (A•10), (A•15), (A•17) および (A•18) を用 いる.

以上より,式(9)は次式で示す前向きおよび後向き予 測誤差で表わした関係式に書換えることができる.

$\xi_1 \mathbf{k}_{i_1 1} + \xi_2 \mathbf{k}_{i_2 2} + \xi_3 \mathbf{k}_{i_3 3} + \xi_4 \mathbf{k}_{i_4 4} = 0 (i = 2, 3, 4)$	(10a)
$\xi_2 \mathbf{k}_{i+1} + \xi_5 \mathbf{k}_{i+2} + \xi_6 \mathbf{k}_{i+3} + \xi_7 \mathbf{k}_{i+4} = 0 (i = 1, 3, 4)$	(10b)
$\xi_3 \mathbf{k}_{i_1 1} + \xi_6 \mathbf{k}_{i_1 2} + \xi_8 \mathbf{k}_{i_1 3} + \xi_9 \mathbf{k}_{i_1 4} = 0 (i = 1, 2, 4)$	(10c)
$\xi_4 \mathbf{k}_{i,1} + \xi_7 \mathbf{k}_{i,2} + \xi_9 \mathbf{k}_{i,3} + \xi_{10} \mathbf{k}_{i,4} = 0$ (i=1, 2, 3)	(10d)

但し.

$\xi_1 = \mathbb{E}[\{f_N(n,m)\}^2]$	(10e)
$\boldsymbol{\xi}_2 = \mathbf{E}[\mathbf{f}_{N}(\mathbf{n},\mathbf{m})\mathbf{r}^{I}_{N}(\mathbf{n}-\mathbf{l},\mathbf{m})]$	(10f)
$\xi_3 = \mathbf{E}[f_N(n,m)r^2_N(n-1,m-1)]$	(10g)
$\xi_4 = \mathbf{E}[f_N(n, m)r^3_N(n, m-1)]$	(10h)
$\xi_5 = \mathbf{E}[\mathbf{r}^{i}N(n-1,m)]^2$	(10i)
$\xi_6 = \mathbb{E}[r_N(n-1,m)r_N(n-1,m-1)]$	(10j)
$\xi_7 = E[r_N(n-l,m)r_N(n,m-l)]$	(10k)

$$\hat{\varsigma}_8 = \mathbb{E}[r^2 (n-1, m-1)]^2$$
 (101)

$$\hat{\varsigma}_9 = \mathbf{E}[\mathbf{r}^2_N(n-1,m-1) \ \mathbf{r}^3_N(n,m-1)]$$
 (10m)

$$\xi_{10} = \mathbf{E}[\mathbf{r}^{3}_{N}(\mathbf{n}, \mathbf{m}-1)]^{2}$$
(10n)

更に、付録2に示す式 (A+23)、(A+25)、(A+28) お よび (A+29)の関係式より、 ξ に関して $\xi_1 = \xi_8, \xi_5 = \xi_{10}, \xi_2 = \xi_9 および \xi_4 = \xi_6 の関係が成立することから、$ 上式は1ステージ当り6種類の反射係数からなる次式の関係式に整理することができる.

$$\begin{bmatrix} k_{1,2} \\ k_{1,3} \\ k_{1,4} \end{bmatrix} = -\begin{bmatrix} \xi_5 & \xi_4 & \xi_7 \\ \xi_4 & \xi_1 & \xi_2 \\ \xi_7 & \xi_2 & \xi_5 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_2 \\ \xi_3 \\ \xi_4 \end{bmatrix}$$
(11a)

$$\begin{bmatrix} \mathbf{k}_{2^{+}1} \\ \mathbf{k}_{2^{+}3} \\ \mathbf{k}_{2^{+}4} \end{bmatrix} = -\begin{bmatrix} \xi_{1} & \xi_{3} & \xi_{4} \\ \xi_{3} & \xi_{1} & \xi_{2} \\ \xi_{4} & \xi_{2} & \xi_{5} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \xi_{2} \\ \xi_{4} \\ \xi_{7} \end{bmatrix}$$
(11b)

-1

但し,

$$\begin{aligned} & k_{1,2} = k_{3,4}, \quad k_{1,3} = k_{3,1}, \\ & k_{2,1} = k_{4,3}, \\ & k_{2,3} = k_{4,1}, \\ & k_{2,4} = k_{4,2} \end{aligned} \tag{11c}$$

このとき,次(11)を満たす反射係数行列 **k**_{N+1}に対し, 次式で示す係数に関する再帰式が成立する.

$$= \mathbf{k}_{N+1} \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{N+1}(0) & \mathbf{a}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{a}_{N+1}(N) & \mathbf{a}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{b}_{N+1}(0) & \mathbf{b}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{b}_{N+1}(N) & \mathbf{b}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{c}_{N+1}(0) & \mathbf{c}_{N+1}(1) & \cdots & \mathbf{c}_{N+1}(N) & \mathbf{c}_{N+1}(N+1) \\ \mathbf{d}_{N+1}(0) & \mathbf{d}_{N-1}(1) & \cdots & \mathbf{d}_{N+1}(N) & \mathbf{d}_{N+1}(N+1) \end{bmatrix}$$

$$= \mathbf{k}_{N+1} \begin{bmatrix} \mathbf{a}_{N}(0), 0 & \mathbf{a}_{N}(1), 0 & \cdots & \mathbf{a}_{N}(N) & 0 & 0 \\ 0 & \mathbf{b}_{N}(0), 0 & \cdots & \mathbf{b}_{N}(N-1), 0 & \mathbf{b}_{N}(N), 0 \\ 0 & 0, \mathbf{c}_{N}(0) & \cdots & 0, \mathbf{c}_{N}(N-1) & 0, \mathbf{c}_{N}(N) \\ 0, \mathbf{d}_{N}(0) & 0, \mathbf{d}_{N}(1) & \cdots & 0, & \mathbf{d}_{N}(N) & 0 \end{bmatrix}$$
(12)

また、上式に付録1で定義した (N+2)²次元のベク トル Y_{N+1}を右乗すると共に、式(1)および付録1の関 係式を用いれば、式(12)は次式で示す前向きおよび後向 き予測誤差に関する再帰式に書換えることができる。



なお、Parker らにより提案された2次元格子形フィ ルタは、反射係数行列 k_{N+1} の要素間において、 $k_{1,2}$ = $\mathbf{k}_{2,1}$, $\mathbf{k}_{1,3}$ = $\mathbf{k}_{2,4}$ および $\mathbf{k}_{1,4}$ = $\mathbf{k}_{2,3}$ の関係があり、結 果として、1ステージ当り3種類の反射係数により構 成される、従って、同フィルタの利用では、この係数 間における制約のために十分近似し得ない特性が存在 することになる.一方、渡辺らにより提案された2次 元格子形フィルタは、1ステージ当り6種類の反射係 数により構成されているが,同関係式は E[{f_N(n,m) }²] = E[{rk(n-1,m)}²] が成立するときのみ保証さ れる.しかしながら、2次元定常確率場においてこの 条件は必ずしも成立しないことから、この2次元格子 形フィルタの利用でも、十分近似し得ない特性が存在 することになる、なお、本手法の有効性を検証するた め、次式で示される2次の差分方程式を対象に2次元 格子形フィルタを構築し、Parker らおよび渡辺らに より提案された2次元格子形フィルタとの比較検討を 行う.

y(i, j) = w(i, j) + 0.40y(i, j-1) - 0.18y(i, j-2)+0.52y(i-1, j) +0.16y(i-1, j-1) +0.10y(i-1, j-2) -0.20y(i-2, j) +0.11y(i-2, j-1) -0.10y(i-2, j-2)

但し,w(i,j)は平均零で分散1の正規白色信号

また,構築したフィルタの特性を定量的に評価する ため,次式で定義する特性評価量 PI を用いる.

$$PI = 10 \cdot \log_{10} \left\{ \frac{tr[(A^* - A)^T (A^* - A)]}{tr[(A^* A^*]]} \right\}$$

但し、 $A = [a_N^T(0), a_N^T(1), \dots, a_N^T(N)]^T$ であり、また、 tr[•]は行列のトレース演算子を意味するなお、行列 A^* は対象システムの係数行列を、行列 A は3手法 によりそれぞれ推定された係数行列を示す. Parker ら、渡辺らおよび本手法による PI を表1に示す. 表1より、本格子形フィルタが、Parker らおよび渡 辺らに比べ良好な推定結果が得られることが分かる.

表1 特性評価料 PI

	Parker B	渡辺ら	本手法
PI	-14 [dB]	-22 [dB]	-31 [dB]

3. 2次元因果性 AR モデルによるスペクトル推定

いま,2次元定常不規則信号過程が図1のように表 されるものとする.

$$\frac{\mathsf{w}(\mathsf{n},\mathtt{m})}{\mathsf{H}_1(\omega_1,\omega_2)} \xrightarrow{\mathsf{y}(\mathsf{n},\mathtt{m})}$$

図1 不規則信号過程

このとき,不規則信号 y(n,m)の自己相関関数 R(s, t)と AR モデルのパラメータの間に次の関係が成立 する.

$$R(s,t) = -\sum_{p=0}^{N-1} \sum_{q=0}^{M-1} a_{i}(p,q) R(s-p,t-q) + \sigma_{i}^{2} \delta(s,t)$$
$$(p,q) \neq (0,0) \quad (0 \le s \le N, 0 \le t \le M)$$
$$(\sigma_{i}^{2}: 白色信号の分散) \quad (14)$$

ここで、図1中の1 $/H_1(\omega_1, \omega_2)$ は第1象限にのみ インパルス応答が存在するモデル、すなわち、第一象 限フィルタである.

$$H_{1}(z_{1}, z_{2}) = -\sum_{p=0}^{N-1} \sum_{q=0}^{M-1} a_{1}(p, q) z_{1}^{-p} z_{2}^{-q}$$
(15)

但し, a(0,0)=1 いま, 式(4)の方程式群を行列形式にまとめると,

$$\Phi_{\mathbf{N}\mathbf{M}}\mathbf{a}_{\mathbf{I}} = \mathbf{P}_{\mathbf{I}} \tag{16}$$

但し,

$$\mathbf{a}_{1} = [1, \mathbf{a}_{1}(0, 1), \dots, \mathbf{a}_{1}(0, M-1), \mathbf{a}_{1}(1, 0), \dots$$
$$\mathbf{a}_{1}(1, M-1), \dots, \mathbf{a}_{1}(N-1, 0), \dots,$$
$$\mathbf{a}_{1}(N-1, M-1)]^{\mathrm{T}}$$
$$\mathbf{P}_{1} = [\mathbf{a}_{1}^{2}, 0, \dots, 0]^{\mathrm{T}}$$

 Φ_{NM} :R(i,j) を要素とするブロックテプリッツ行列と 表すことができ,式(6)より $a_1 = \Phi_{NM}^{-1}P_1$ により, AR モデルパラメータが導出される. 導出された AR モデルパラメータより、そのスペクトル $S_1(\omega_1, \omega_2)$ が以下のように定義される.

$$S_{1}(\omega_{1}, \omega_{2}) = \frac{\sigma_{1}^{2}}{|H_{1}(\omega_{1}, \omega_{2})|^{2}}$$
(17)

図1では、不規則信号過程を第1象限 AR モデルと 仮定していたが、第4象限 AR モデルと仮定すれば、

 $\Phi_{NM}a_4 = P_4$

但し.

$$\mathbf{a}_{4} = [\mathbf{a}_{4}(0, \mathbf{M}-1), \cdots, \mathbf{a}_{4}(0, 1), 1, \mathbf{a}_{4}(1, \mathbf{M}-1), \cdots, \\ \mathbf{a}_{4}(1, 0), \cdots, \mathbf{a}_{4}(\mathbf{N}-1, \mathbf{M}-1), \cdots, \\ \mathbf{a}_{4}(\mathbf{N}-1, 0)]^{\mathsf{T}} \\ \mathbf{P}_{4} = [0, \cdots, 0, \sigma_{4}^{2}, 0, \cdots, 0]^{\mathsf{T}}$$

$$\frac{1}{S(\omega_1, \omega_2)} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{S_1(\omega_1, \omega_2)} + \frac{1}{S_4(\omega_1, \omega_2)} \right)$$
(19)

上記の因果性 AR モデルによるスペクトル解析手法 を基盤に,渡辺らは格子形フィルタによるスペクトル 解析の一手法を提案している⁽⁰⁾.まず,求めるべき第 1象限 AR モデルG₁(z₁, z₂)および第4象限 AR モ デル G₄(z₁, z₂)をそれぞれ次式のように定義する.

$$G_{1}(z_{1}, z_{2}) = \frac{1}{A_{N}(z_{1}, z_{2})}$$
(20a)

$$G_4(z_1, z_2) = \frac{1}{D_N(z_1, z_2)}$$
(20b)

但し、A_N(z₁, z₂) および D_N(z₁, z₂) は前向きおよび 後向き予測誤差の予測誤差伝達関数で次式で定義され る.

$$\mathbf{A}_{\mathbf{N}}(\mathbf{z}_1, \mathbf{z}_2) = \sum_{i=0}^{N} \mathbf{a}_{\mathbf{N}}(i) \mathbf{z}_i$$
(21a)

$$D_{N}(z_{1}, z_{2}) = \sum_{i=0}^{N} d_{N}(i) z_{i}$$
(21b)

なお、予測係数 $a_N(i)$ および $d_N(i)$ は先の2次元格 子形フィルタより導出され、 $G_1(z_1, z_2)$ および $G_4(z_1, z_2)$ は式(20)および(21)より得られる.それ故、推定 すべきスペクトル $S_R(\omega_1, \omega_2)$ は先の調和平均手法に 基づき次式のように定義される.

$$\frac{1}{S_{R}(\omega_{1},\omega_{2})} = \frac{1}{2} \left(\frac{1}{\sigma_{1}^{2} |G_{1}(\omega_{1},\omega_{2})|^{2}} + \frac{1}{\sigma_{4}^{2} |G_{4}(\omega_{1},\omega_{2})|^{2}} \right)$$
(22)

但し, σ₁²およびσ₄²はそれぞれ第1象限および第4象 限予測誤差フィルタの分散

以上の結果を踏まえ、次の不規則信号 y(i,j) のス ペクトル推定を行う。

図2 (a)には2次元格子形フィルタの段数を2段に設 定した際の,第1象限格子形フィルタによるスペクト ル推定結果を示し,また,図2 (b)には第4象限格 子形フィルタによるスペクトル推定結果を示した.更 に,図2 (c)に,第1象限および第4象限格子形フィ ルタによるパワースペクトルのに調和平均をとったス ペクトル推定結果を示している.なお,参考のため図 3には式(23)より得られる結果を示している.図2およ び図3より明らかなように,第1象限および第4象限 格子形フィルタのみでは完全なスペクトル推定がなさ れないが,その調和平均をとることにより正確な推定 が行われていることがわかる.

74



(a) 第1象限格子形フィルタによるスペクトル推定



(b) 第4象限格子形フィルタによるスペクトル推定



(c) 調和平均によるスペクトル推定

図2 格子形フィルタによるスペクトル推定結果



図3 真のスペクトル

5. むすび

本論文では、正規方程式の逐次解決であるレビンソ ン・ダービン算法を2次元に拡張し、2次元格子形フ ィルタを構築した.また、本手法の有効性を Parker らおよび渡辺らの2次元格子形フィルタによ り得られる前向き予測誤差フィルタの伝達関数および 特性評価量との比較により行なった.なお、本手法の 特徴は、予測誤差として一つの前向き予測誤差と三つ の後向き予測誤差を用いて逐次式を構築することか ら、有限次数のマスクに対しても安定な逐次解法が得 られることにある.また、本予測器の一応用例として スペクトル推定をとりあげ、良好な推定が行えること を確認した.

文 献

- T. L. Marzetta: "Two-dimensional linear prediction: autocorrelation arrays, minimum-phase prediction error filters, and reflection coefficient arrays", IEEE Trans. Acoust., Speech & Signal Process., ASSP-28, 6, pp. 725-733 (Dec. 1980).
- (2) S. Ranganath and A. K. Jain: "Two-dimensional linear prediction models-part l: spectral factorization and realization", IEEE Trans. Acoust., Speech & Signal Process., ASSP-33, l, pp. 280-299 (Feb. 1985).
- (3) S. R. Parker and A. H. Kayran: "Lattice parameter autoregressive modelingof twodimensional fields-part 1: the quarter-plane case", IEEE Trans, Acoust., Speech & Signal Process., ASSP 32, 4, pp. 872-885 (Aug. 1984).
- (4) 渡辺 努,田口 亮,浜田 望: "改良された2 次元 AR 格子形フィルタに関する考察とスペク トル解析への応用",信学論(A), J72-A, 3, pp. 475-484 (1989-03).
- (5) 須田信英, 中溝高好: "コンピュートロール23", コロナ社 (1988-07).

付 録

1. 式(10)の導出

式(1)で示す (N+1) 次元のベクトル $a_N(i)$ および $y(i)を要素とする (N+2)²次元のベクトル â および <math>Y_{N+1}$ をそれぞれ次式のように定義する.

$$\begin{split} \tilde{a} &= [a_N(0), 0 \stackrel{!}{\vdots} a_N(1), 0 \stackrel{!}{\vdots} \cdots \stackrel{!}{\Rightarrow} a_n(N), 0 \stackrel{!}{\Rightarrow} 0] \quad (A \cdot 1) \\ Y^T_{N+1} &= [Y^T(0), y(n, m-N-1) \stackrel{!}{\Rightarrow} y^T(1), \\ y(n-1, -N-1) \stackrel{!}{\Rightarrow} \cdots \stackrel{!}{\Rightarrow} \\ y^T(N), y(n-N, m-N-1) \stackrel{!}{\Rightarrow} y^T(N+1), y(n-N, \\ m-N-1)] \quad (A \cdot 2) \end{split}$$

このとき, 上記のベクトル â および Y_{N+1}の積 â Y_{N+1}が式 (la)より

$$\tilde{a}Y_{N+1} = f_N(n,m) \tag{A-3}$$

となることから、次式の関係式が得られる.

$$\begin{split} \hat{\mathbf{a}} \mathbf{R}_{N+1} \tilde{\mathbf{a}}^{\mathrm{T}} &= \tilde{\mathbf{a}} \mathbf{E} [\mathbf{Y}_{N+1} \mathbf{Y}^{\mathrm{T}}_{N+1}] \quad \tilde{\mathbf{a}}^{\mathrm{T}} \\ &= \mathbf{E} [\{\mathbf{f}_{N}(\mathbf{n}, \mathbf{m})\}^{2}] = \tilde{\mathbf{J}}^{\mathbf{o}}_{N} \end{split} \tag{A-4}$$

同様に, b_N(i), c_N(i)および d_N(i)を要素とする (N+2)²次元のベクトル b, c および d をそれぞれ

$$\tilde{\mathbf{b}} = \begin{bmatrix} 0 & : \mathbf{b}_{N}(0), 0 : \mathbf{b}_{N}(N-1), 0 : \mathbf{b}_{N}(N), 0 \end{bmatrix} \quad (\mathbf{A} \cdot 5) \\ \tilde{\mathbf{c}} = \begin{bmatrix} 0 & : 0, \mathbf{c}_{N}(0) : : 0, \mathbf{c}_{N}(N-1) : : 0, \mathbf{c}_{N}(N) \end{bmatrix} \quad (\mathbf{A} \cdot 6) \\ \tilde{\mathbf{d}} = \begin{bmatrix} 0, \mathbf{d}_{N}(0) : 0, \mathbf{d}_{N}(1) : : 0, \mathbf{d}_{N}(N) & : 0 \end{bmatrix} \quad (\mathbf{A} \cdot 7)$$

と定義することにより、次式の関係式が得られる.

$$\tilde{b}R_{N+1}\tilde{b}^{T} = E[\{r_{N}^{i}(n-1,m)\}^{2}] = \hat{J}_{N}^{i}$$

$$\tilde{c}R_{N+1}\tilde{c}^{T} = E[\{r_{N}^{2}(n-1,m-1)\}^{2}] = \hat{J}_{N}^{2}$$

$$\tilde{d}R_{N+1}\tilde{d}^{T} = E[\{r_{N}^{3}(n,m-1)\}^{2}] = \hat{J}_{N}^{3}$$

$$(A*0)$$

$$(\tilde{a}R_{N+1})\tilde{b}^{T} = \sum_{t=0}^{N} b_{N}(0,t) \Delta^{a}_{N+1,t}$$
 (A•11)

$$\tilde{\mathbf{a}}(\mathbf{R}_{N+1}\tilde{\mathbf{b}}^{T}) = \sum_{t=0}^{N} \mathbf{a}_{N}(0, t) \Delta^{b}_{0, 1}$$
(A•12)

となるが、予測誤差を用いて表現すれば次式となる.

 $\tilde{\mathbf{a}}\mathbf{R}_{N+1}\tilde{\mathbf{b}}^{\mathrm{T}} = \tilde{\mathbf{a}}\mathbf{E}[\mathbf{Y}\mathbf{Y}^{\mathrm{T}}]\tilde{\mathbf{b}}^{\mathrm{T}}$ $= \mathbf{E}[\mathbf{f}_{N}(\mathbf{n},\mathbf{m})\mathbf{r}^{\mathrm{I}}_{N}(\mathbf{n}-1,\mathbf{m})] \qquad (\mathbf{A} \cdot \mathbf{13})$

同様な操作により、āR_{N+1}č^T、āR_{N+1}d^T、 ĎR_{N+1}č^T、 Ď

 $\mathbf{R}_{N+1} \overline{\mathbf{d}}^T$ および $\mathbf{c} \mathbf{R}_{N+1} \overline{\mathbf{d}}^T$ はそれぞれ以下のようになる.

$$\tilde{(aR_{N+1})}\tilde{c}^{T} = \sum_{s=0}^{N-1} c_{N}(N-s,0) \Delta^{a}_{s+1,N+1} + \sum_{t=0}^{N} c_{N}(0,N-t) \Delta^{a}_{N+1,t+1} \\ \tilde{a}(R_{N+1})\tilde{c}^{T} = \sum_{s=1}^{N} a_{N}(s,0) \Delta^{c}_{s,0} + \sum_{t=0}^{N} a_{N}(0,t) \Delta^{c}_{0,t}$$
 (A·14)

 $\tilde{a}R_{N+1}\tilde{c}^{T} = E[f_{N}(n,m)r^{2}_{N}(n-1,m-1)]$

$$\begin{aligned} & (\tilde{a}R_{N+1})\tilde{d}^{T} = \sum_{s=0}^{N} d_{N}(s,0)\Delta^{a}_{s,N+1} \\ & (\tilde{a}R_{N+1})\tilde{d}^{T} = \sum_{s=0}^{N} a_{N}(s,0)\Delta^{d}_{s,0} \end{aligned}$$
 (A-15)

$$\tilde{a}R_{N+1}\tilde{d}^{T} = E[f_{N}(n,m)r_{N}^{3}(n,m-1)]$$

$$(\tilde{b}R_{N+1})\tilde{c}^{T} = \sum_{s=0}^{N} c_{N}(N-s,0)\Delta^{b}_{s+1,N+1}$$

$$(\tilde{b}R_{N+1})\bar{d}^{T} = \sum_{s=0}^{N} b_{N}(N-s,0)\Delta^{c}_{s+1,0}$$

$$(A \cdot 16)$$

$$\tilde{\mathbf{b}}\mathbf{R}_{N+1}\tilde{\mathbf{c}}^{T} = \mathbf{E}[\mathbf{r}^{I}_{N}(n-1,m)\mathbf{r}^{2}_{N}(n-1,m-1)]$$

$$(\tilde{\mathbf{b}}\mathbf{R}_{N+1})\tilde{\mathbf{d}}^{T} = \sum_{s=1}^{N} \mathbf{d}_{N}(s,0) \Delta^{b}_{s,N+1} + \sum_{t=0}^{N} \mathbf{d}_{N}(0,N-t) \Delta^{b}_{0,t+1}$$

$$\vec{b}(R_{N+1})\vec{d}^{T} = \sum_{s=0}^{\infty} b_{N}(N-s,0)\Delta^{d}_{s+1,0} + \sum_{s=0}^{N} b_{N}(0,t)\Delta^{d}_{N+1,1}$$
(A·17)

$$\tilde{b}R_{N+1}\tilde{d}^{T} = E[r_{N}^{1}(n-1,m)r_{N}^{3}(n,m-1)]$$

$$(\tilde{c}R_{N+1})\tilde{d}^{T} = \sum_{t=0}^{N} d_{N}(0, N-t)\Delta^{c}_{0+t+1}$$
$$\tilde{c}(R_{N+1})\bar{d}^{T} = \sum_{t=0}^{N} c_{N}(0, N-t)\Delta^{d}_{N+1+t+1}$$
(A-18)

$$\tilde{c}R_{N+1}\tilde{d}^{T} = E[r^{2}N(n-1,m-1)r^{3}N(n,m-1)]$$

2. 式(1)の導出

式 (3a) の第1式および (N+1)²×(N+1)²次元か らなる exchange 行列を⁽³⁾,式 (3a)の第3式に右乗

76

した関係式を以下に示す.

$$\begin{split} [a_{N}(0) &\vdots a_{N}(1) \vdots \cdots \vdots a_{N}(N-1) \vdots a_{N}(N)]R_{N} \\ &= [\hat{J}^{o}_{N}, 0, \cdots, 0 \vdots 0 \vdots \cdots \vdots 0 \vdots 0] \quad (A \cdot 19) \\ [c_{N}(0) &\vdots c_{N}(1) \vdots \cdots \vdots c_{N}(N-1) \vdots c_{N}(N)]EER_{N}EE \\ &= [\tilde{c}_{N}(N) \vdots \tilde{c}_{N}(N-1) \vdots \cdots \vdots \tilde{c}_{N}(1) \vdots \tilde{c}_{N}(0)]R_{N} \\ &= [\hat{J}^{2}_{N}, 0, \cdots, 0 \vdots 0 \vdots \cdots \vdots 0 \vdots 0] \quad (A \cdot 20) \end{split}$$

但し,

$$\mathbf{E}\mathbf{E} = \mathbf{I}, \mathbf{R}_{\mathbf{N}}\mathbf{E} = \mathbf{R}_{\mathbf{N}} \tag{A.21}$$

なお、 c_N(i)は c_N(i) の順序を反転させたペクトルを 表わし、I は (N+1)²×(N+1)²次元の単位行列を表 わす. このとき、上記の関係式および式 (le), (lg), (A・4) および (A・9) より以下の関係式が得られる.

 $\mathbf{a}_{N}(\mathbf{i},\mathbf{j}) = \mathbf{c}_{N}(\mathbf{i},\mathbf{j}) \tag{A-22}$

 $\mathbf{E}[\{\mathbf{f}_{N}(\mathbf{n},\mathbf{m})\}^{2}] = \mathbf{E}[\{\mathbf{r}_{N}^{2}(\mathbf{n}-1,\mathbf{m}-1)\}^{2}] \qquad (\mathbf{A} \cdot 23)$

同様に,式(3a)の第2式および式(3a)の第4式に E を右乗した関係式と式(1f),(1h),(A・8)および (A・10)より以下の関係式が得られる.

$$\mathbf{b}_{\mathbf{N}}(\mathbf{i},\mathbf{j}) = \mathbf{d}_{\mathbf{N}}(\mathbf{i},\mathbf{j}) \tag{A-24}$$

$$\mathbf{E}[\{\mathbf{r}^{1}_{N}(n-1,m)\}^{2}] = \mathbf{E}[\{\mathbf{r}^{3}_{N}(n,m-1)\}^{2}] \quad (\mathbf{A} \cdot 25)$$

 $E[f_N(n,m)r^i{}_N(n-1,m)]$

$$= \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} \sum_{t=0}^{N} b_{N}(0, t) a_{N}(i, j) R(N+1-i, t-j)$$
(A・26)
また,式 (A・18) の第1, 3式および式 (7d) より

 $E[r_{N}^{2}(n-1,m-1)r_{K}^{3}(n,m-1)]$

$$= \sum_{i=0}^{N} \sum_{j=0}^{N} \sum_{t=0}^{N} d_{N}(0, t) c_{N}(i, j) R(N+1-i, t-j) \quad (A \cdot 27)$$

となるが,式(A•22)および(A•24)より次式が得 られる.

$$E[f_{N}(n,m)r_{N}^{i}(n-1,m)] = E[r_{N}^{2}(n-1,m-1)]$$

$$r_{N}^{3}(n,m-1)] \qquad (A*28)$$

同様に,式(A・15)の第2,3式および式(7e)より,また,式(A・16)の第1,3式および式(7c)より次式が得られる.

$$E[f_{N}(n,m)r^{3}_{N}(n,m-1)] = E[r^{1}_{N}(n-1,m)$$

$$r^{2}_{N}(n-1,m-1)]$$
(A•29)